

令和 8 年 2 月 20 日

大阪市総合教育センター
教育振興担当 実践研究グループ
首席指導主事様

研究コース	
B グループ研究B	
校園コード (代表者校園の市費コード)	
511001	
選定番号	223

代表者	校園名:	堀川小学校
	校園長名:	衣笠 博政
	電話:	6358-3336
	事務職員名:	藤原 沙妃
申請者	校園名:	堀川小学校
	職名・名前:	首席・流田 賢一
	電話:	6358-3336

令和7年度 「がんばる先生支援」報告書

◇「がんばる先生支援」について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	B グループ研究B	研究年数	継続研究 (3年目)												
2	研究テーマ	子ども主語への学びの転換 - 国語科の指導の系統と個別最適な学びをめざす授業のあり方 -															
3	研究目的	1. シンプルな授業づくりとなり児童主体の学びへと転換するために、指導の系統を意識した学習内容の精選 2. 児童が学びをメタ認知し、自己調整できるためのポートフォリオの開発 単元始一学びの変遷一単元末を一覧できる方法 (デジタルとアナログ) 3. 国語科の個別最適な学びを理論研修、整理、提案、検証 個別最適な学びを実施する場面を整理、単元のどこで実施できるか実践提案 4. 子ども主語へ学びが転換することで学ぶ意欲が向上と学力の向上の相関関係を検証 5. 教材分析一公開授業を同一教材でセット開催することで教員の指導力向上 6. 公開研究会を複数回開催し、賛同者を増やし全国に研究の輪を拡大															
4	取り組んだ研究内容	いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。 (MSJ シック 9.5枚 イント) 年間計画 4月---5月---6月---7月---8月---9月---10月---11月---12月---1月---2月---3月 教材分析 《指導内容精選・教材分析》→《系統整理・単元構造化》→《授業モデル検証》 公開の場 【教材分析公開】→→→→【公開授業】 上記は年間計画のイメージ図である。以下、具体的に内容を示す。 『研究企画会』4月 研究3年目として、「子ども主語への学びの転換」を研究の中心に据え、研究成果の整理とモデル化を目的に計画を立案した。めざす子ども像を「問いをもち、学び方を選択し、自ら学びを調整できる子ども」とし、「問いを起点とする学習構造」「学び方を選べる授業構成」「振り返りによる学習調整」を授業設計の共通原則として確認した。 《指導内容精選・教材分析 6回》 各教材について、「教材の構造」「文章構成・育てたい力 (読む力・考える力・表現する力)」「問いが生まれる場面を明確化する教材分析」を実施した。 学習内容を精選し、「教師が教える内容」と「児童が追究する内容」を整理することで、児童が自分で学習の進め方を選択できる授業構造へと再構成した。 《系統整理・単元構造化 8回》 学年ごとの教材を一覧化し、「身に付ける力」「問いの質」「思考の深まり方」を学年横断で整理した。これをもとに、「導入 (協働)→個別追究 (選択学習)→統合 (協働)」の学習構造を単元レベルで設計し、個別最適な学びが成立する単元モデルとして体系化した。 【公開：教材分析・単元構造化提案】8月 教材分析と単元構造化をセットで公開した。 参加者はグループで教材分析を行い、問いの設定、学習過程、個別追究場面の構成を検討し、その後研究メンバーが単元モデルを提案した。 教材理解から授業設計までの思考過程を可視化する研修構成とした。 【公開：研究授業・授業モデル検証】10月 構築した単元モデルを実際の授業として公開した。(2年物語文「かさこじぞう」) 児童が問いをもとに学習方法を選択し、資料・本文・ポートフォリオを活用しながら追究し、振り返りによって学びを調整する学習過程を授業として具現化した。ICTを活用することにより、児童相互の学びの共有、教員が児童の学びを把握し指導にいかす指導法として提案した。 モデルの有効性と再現性を授業実践として検証した。 《研究の振り返り・検証》 学力調査、児童アンケート、学習記録、インタビューをもとに検証を実施した。 「学習意欲の変化」「学習の主体性」「既習活用の実態」「学習調整行動の出現」を分析し、「子ども主語の学び」への転換が学習成果に結びついているかを検証した。															
5	研究発表等の日程・場所・参加者数	研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。 <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td>日程</td> <td>令和 7 年 10 月 29 日</td> <td>参加者数</td> <td>約 170 名</td> </tr> <tr> <td>場所</td> <td colspan="3">堀川小学校</td> </tr> <tr> <td>備考</td> <td colspan="3">令和7年8月23日 国語科教材分析研究会 参加者数：約35名 場所：堀川小学校 waku×2.com-beeに研究会資料「指導案」掲載済み</td> </tr> </table>				日程	令和 7 年 10 月 29 日	参加者数	約 170 名	場所	堀川小学校			備考	令和7年8月23日 国語科教材分析研究会 参加者数：約35名 場所：堀川小学校 waku×2.com-beeに研究会資料「指導案」掲載済み		
日程	令和 7 年 10 月 29 日	参加者数	約 170 名														
場所	堀川小学校																
備考	令和7年8月23日 国語科教材分析研究会 参加者数：約35名 場所：堀川小学校 waku×2.com-beeに研究会資料「指導案」掲載済み																

6	成果・課題	<p>大阪市教育振興基本計画に示されている、「子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成および「教員の資質や指導力」の向上について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。</p>
		<p>【見込まれる成果1】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成 <input type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>ポートフォリオ作成により、児童の学びの方向性がはっきりとする。単元末には学んだ内容と次への学び方を振り返り、自らの学びをメタ認知することができる。学び方を変革することで、児童の学力が向上する。</p> <p>《検証方法》 経年調査国語科の「基礎・活用」（学力）で大阪市平均を超える。学びを振り返り「自分には力がついた」（学力のメタ認知）「今までの学習を思い出し、活用できないかと考える」（既習の活用）と回答する児童の割合が8割以上となる。そして、「今までの学びとの違いをインタビュー調査」（学びの変容）し、児童の学び方が学習意欲や学習内容の理解に与える影響を検証する。</p>
		<p>〔検証結果と考察〕</p> <p>経年調査における国語科「基礎・活用」領域では、全学年で大阪市平均を上回る結果が確認された。児童アンケートでは「自分には力がついた」93%、「既習の学習を思い出し活用しようとする」90%と、肯定的回答が9割を超えた。ポートフォリオの振り返り記述には、「前の単元で学んだ要約の仕方を使って考えた」「問いを立てて読むと内容が整理できた」など、学び方の自覚化を示す具体的な記述が多く見られた。また、インタビュー調査では「何を学ぶかだけでなく、どう学ぶかを考えるようになった」といった発言が確認された。これらの結果から、ポートフォリオを活用した学びの可視化と振り返りが、学習のメタ認知を促進し、主体的な学習行動と学力向上の両立に有効であることが示された。</p>
		<p>【見込まれる成果2】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成 <input type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>国語科の個別最適な学びとは、共通のゴールに向かって自ら決めた方法により読み深める学びである。自ら選択・判断・追究することは、児童の意欲の向上、学ぶ力の向上につながる。受け身の学習ではなく、自ら学習するためポートフォリオを見返しながら学びを調整する姿も期待できる。子ども主語の学びは、学びの楽しさを実感することができる。</p> <p>《検証方法》 経年調査国語科の「主体的に学習に取り組む態度」が大阪市平均を超える。児童アンケートの「課題解決に向けて最後まで取り組んだ」「どう学んだらよいかを考えた」「問題に出会った時に問いを持ち考えることができた」「学ぶことは楽しい」の割合が9割以上になる。</p>
<p>〔検証結果と考察〕</p> <p>経年調査国語科において「主体的に学習に取り組む態度」は大阪市平均を上回る結果となった。児童アンケートでは、「課題解決に向けて最後まで取り組んだ」100%、「どう学んだらよいかを考えた」90%、「問いをもって考えた」91%、「学ぶことは楽しい」97%と、いずれも肯定的回答が9割を超えた。授業場面では、「要約で理解を深めたい」「対話で考えを広げたい」など、学習方法を自ら選択する姿が見られ、ポートフォリオを見返しながら学び方を調整する児童も確認された。振り返りには「自分に合う学び方が分かってきた」「問いを立てると考えが深まった」といった記述が多く見られた。これらの結果から、共通目標に向かいながら学習方法を自己選択する「子ども主語の学び」は、学習意欲の向上と主体的学習態度の形成に有効であり、個別最適な学びの質的向上につながっていることが示された。</p>		
<p>【見込まれる成果3】</p> <p><input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成 <input checked="" type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>教科の本質、教材で学ぶ本質を見極めることでシンプルな授業展開となるため、教材分析力が向上する。大学教授や先進的研究校教員から今後求められる指導について学ぶことができ、児童主体の学びへと転換することができる。理論と実践をつなげて学ぶことができるため、児童の具体的な姿をもとに研究を進めることができる。</p> <p>《検証方法》 研究メンバーへのアンケート結果から、指導力の向上についての肯定的割合が9割以上となる。公開授業研究会では、実際の児童の学びを見てもらい参会者の満足度が8割以上となる。系統を意識した学びを提案し、「系統を意識した授業を実践している」の割合を研究会への複数回参加者の割合が向上する。このことで研究の広がりを検証する。</p>		
<p>〔検証結果と考察〕</p> <p>研究メンバーへのアンケートにおいて、「指導力が向上した」とする肯定的回答は100%となり、教材分析力および授業構成力の向上が数値として確認された。特に、「教材の本質を明確にしたことで授業展開がシンプルになった」「学習の核が明確になり、児童の学びが深まった」といった自由記述が多く見られた。公開授業研究会では、参会者満足度が100%となり、「児童の学ぶ姿が明確に見える授業構成」「教材分析に基づく問いの設定が有効」「ICTの効果的な活用で個別最適な学びにつながっている」との評価が得られた。また、系統を意識した授業提案を継続的に行った結果、複数回参加者における「系統を意識した授業を実践している」との回答割合が前年差15ポイント上昇した。これらの結果から、理論研修と実践研究を往還させる研究体制が、教員の指導力向上と授業の質的転換を促進し、児童主体の学びへの転換に有効であることが示された。</p>		

6	成果・課題	<p>【見込まれる成果4】</p> <p><input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>本研究会で個別最適な学びの授業観、児童観を定義し、提案する。参加者から提案内容について賛同を受ける。国語科での個別最適な学びの実践例が少ないため、本研究会での実践例提案や研究授業での提案を参考に実践が広がる。単元のどこに個別最適な学びを位置付けるかや、児童の学びの方法を分類整理する。研究会で以上のことを提案し、参会者に個別最適な学びが広がっていく。</p> <p>《検証方法》</p> <p>授業観、児童観を提案し、参加者アンケートで是非を問う。教科の本質、教材で学ぶ本質をまとめたものを研究会で参会者に配付する。参会者アンケートの「自らの実践に活用したい」が8割以上となる。そして、参会者アンケートの「個別最適な学びを実践している」の割合を研究会への複数回参加者の割合が向上する。このことで研究の広がりを検証する。</p> <p>[検証結果と考察]</p> <p>研究会において、国語科における個別最適な学びの授業観・児童観を定義し、単元構成モデルおよび実践事例として提案した。参加者アンケートでは、提案内容への賛同が100%、「自らの実践に活用したい」が91%と高い肯定的評価が得られた。配付資料として示した「教科の本質・教材で学ぶ本質」整理表や、単元内における個別最適な学びの位置付けモデル（導入・展開・追究・振り返り段階）は、「授業設計の指針として活用できる」との評価を得た。また、複数回参加者を対象とした追跡アンケートにおいて、「個別最適な学びを実践している」と回答した割合が前年差12ポイント上昇し、研究会提案が実践への波及と研究の広がりを生んでいることが確認された。</p> <p>以上より、本研究会の提案は、国語科における個別最適な学びの具体像を明確化し、現場実践へと接続する有効な研究発信となったことが示された。</p>
---	-------	---

6	研究全体を通じた成果と課題	<p>【研究全体を通じた成果と課題】 研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、端的に記述してください。</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>○成果・読書会・理論研修を重ね、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実に向けた授業デザインの提案ができた。【協働】読みの土台→【個別】問いの追究(選択可能)→【協働】学びの共有・取組の結果として、学ぶ必然性を生む問い、必要感のある協働の学びが学力向上・学ぶ意欲向上につながった。・教材分析と授業を同一教材で公開したことで、のべ200名以上の参加者があり、本研究内容が参加者に広がった。</p> <p>●課題・個別最適な学びの本研究グループの定義を確立し、目指す子ども像を検討し具体的な提案につなげる。・個別最適な学びと協働的な学びのグラデーションを年間レベル、単元レベルで整理する。・子どもに学びの見通しをどう持たせるか。・価値のある問いの設定、問いの深化へとつながる学びのあり方。・子どもの学びの自覚化を促す振り返りや自己評価・指導者評価のあり方を検討する。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>○成果・個別最適な学びを実現する単元の流れを研究グループ内で整理し、年間複数回実践できた。共通のゴールやテーマに向かい、問いを追求することで学び方を変革させることができた。系統を意識した学びや個別最適な学びは、主体的な学習を実現し、学力向上につながった。意欲的に学び続ける姿や振り返りから、学びを自覚化していると感じた。以上のことは調査結果の数値からも結論づけられる。のべ250名以上の参加者が私たちの研究へ賛同し、研究の広がりを実感できた。</p> <p>●課題・解明したい問いがそれぞれ違うため、ゴールへ近づく距離も変わってくる。そのため効果的な問いの設定の仕方を考えたい。また、個別最適な学びの時間は子どもが勝手に学ぶ時間ではないため、学びへの自由度と教師の指導性の関係を考えたい。</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p> <p>○成果○1・2年目の成果を統合し、「個別最適な学び」を単元構造として体系化し、再現性のある授業モデルを確立した。○児童は、問いを立て、学び方を選択し、振り返りにより学習を調整する学習者像へと変容し、主体性・意欲の向上がアンケート・授業観察・記述から確認された。○教師は、教材分析・単元構想・評価設計を一体化した授業改善が進み、組織的な指導力向上が実現した。○理論—実践—検証—発信の循環型研究体制が確立され、公開研究会等を通して研究成果の妥当性と波及性が実証された。</p> <p>●課題●問いの質に応じた学習支援モデルと教師介入の精緻化。●評価規準・振り返り支援の体系化による学習の自走化。●成果の校内定着と他校・他教科への汎用化。</p> <p>《代表校園長の総評》</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>個別最適な学びと協働的な学びは令和3年答申として示された。個別最適な学びは、まだ実践例は少ないが本グループは単元モデルを作成し提案をした。公開授業での児童の姿は、学ぶことを楽しみ、それぞれの児童が学びに向かう姿が見られた。研究1年目として学力向上や意欲向上の結果が得られたことは成果である。多くの参加者とともに研究を進められたことも研究の「ラッシュアップ」につながっている。今後求められる研究テーマに真摯に向き合い、研究を続けてきたことについてまとめることができた。研究に取り組む熱意を強く感じた研究であった。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>まさに「つながり」を追求した1年だったのではないだろうか。既習教材と学習教材のつながりを意識した学びを展開する。学習のゴールやテーマと自分の追求したいことをつなげて主体的な学びへと誘う。個別最適な学びだけを考えるのではなく、協働的な学びをつなげて実践する。個別で考えた問いを全体の中でつなげて学級の学びとする。研究へ参加する他校の先生とのつながりを大切に、共に学び合う。今後、学びを実感した子どもは自走するだろう。自走するためにはまだ研究を続け、さらなるつながりを児童・指導者・仲間と広げ、深化していく必要がある。これからの研究がますます楽しみである。</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p> <p>3年間の研究により、「個別最適な学び」は理念から実践の型へと昇華し、子ども主語の学びが学校文化として根付き始めた。児童は問いをもち、学び方を選択し、振り返りを通して自ら学びを調整する姿へと確実に変容している。</p> <p>本研究は、理論と実践を往還させながら組織的に推進され、授業改善にとどまらず、学校の教育観そのものを変革する研究となった。公開研究会等を通して成果が力強く波及しており、本校発の研究モデルは、再現性と発信力を備えた教育実践として高く評価できる。</p>
---	---------------	---